

お楽しみは これからだ!

YAH!

ヤー!

2020.10.10

第 17 号

YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

ご当地ソング

『東京・新宿篇』

夕方6時にはもう飲んでいた。三丁目の末広亭のはす向かいにあった「S」で、もしくは新宿駅西口近くの(今でもある…)「V」でまずは下ごしらえ、さていよいよ歌舞伎町の入り口はPPビルの9階だったか?の「SB」で調子を付けて、お次はミラノ座近くまで行って「Z」で腰を落ち着けた。元気と余裕(“スポンサー”)があれば、その何階か上に在った「G」でひとさわぎ?、さすがに同日というわけにはいかないが、或る日にはそこからほど近く、更に路地を入った「K」で終電をお構いなしに飲みもしたが、ほぼ唄っていた。やがて1時2時、戻ってきたタクシーに乗って、運転手には申し訳ないがもう一仕事していただいて東高円寺まで運んでもらった。自宅と通勤で8時間、会社に8時間、そして新宿(ほとんど歌舞伎町)に8時間と、思えば就職後何年間か、実に解り易い日常を過ごしていたものだと、40年も昔のことだが、我がことながら、感心もするし、むろん呆れもする。とにかく、見事に新宿に浸かっていた時代である。

『新宿みなと町』(森進一)、『新宿のおんな』(藤圭子)、『新宿そだち』(津山洋子、大木英夫)、そして『なみだ恋』(八代亜紀…できれば「新宿なみだ恋」としてほしかったが)等など、銀座からは格落ちかもしれないが、安酒の似合う街としては、決して譲らない。当時の新宿(今はさっぱりわからない)は、その全てがいわば“裏町”だったような気がする。

さすがに、“はぐれ者”でこそなかった(と思っているが…)ものの、心情としてはこんなもので実によくわかる、半世紀近くを経て改めて思うに、また深く深く沁みるのである。「盛り場ブルース」(森進一)では、一番で銀座、赤坂、六本木…ラスト(八番)で渋谷、新宿、池袋…となるほどのラインナップと組み合わせだが、個人的には新宿は別格なのである。



木槿(むくげ)

今月のYAH! ね・後記・

その名は「直立させた角ばった茎の先端に、虎の尻尾のような姿に花を付けることにちなんだ」とあるが、いまいちイメージがわからない。「育てやすく、ごく普通に見られるありふれた花」だともあるが、一歩間違えると「雑草待遇」で、「油断」していると、公園整備の際の草刈り作業でついでに刈り取られてしまいそう、時にはじっくりと鑑賞してみよう。



はなとらのお